

オガサワラカワラヒワ共生社会ワーキンググループの課題抽出

佐々木 哲朗^{1*}、向 哲嗣²

Identification of issues for the symbiotic society working group at the Ogasawara Greenfinch Population and Habitat Viability Assessment workshop

Tetsuro SASAKI^{1*} & Akitsugu MUKAI²

1. 小笠原自然文化研究所（〒100-2101 東京都小笠原村父島字西町）
Institute of Boninology, Nishimachi, Chichijima, Ogasawara, Tokyo 100-2101, Japan.
 2. アイランズケア（〒100-2211 東京都小笠原村母島字静沢）
Islands Care, Shizukazawa, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
- * t-sasaki@ogasawara.or.jp (author for correspondence)

要旨

2020年12月に開催した「オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ」は、IUCNが提唱するPHVAワークショッププロセスを採用した。母島はオガサワラカワラヒワが非繁殖期に餌場として利用する有人島であるが、母島における本種と地域住民との共生を議論テーマとした共生社会ワーキンググループでは、ワークショップ本大会前に参加者からアンケート方式で課題の抽出を行った。抽出された課題を整理したところ、ネコ対策が不十分、外来ネズミ対策が不十分、餌環境や水場環境が不安定、調査研究不足、保全する組織体制が無い事、知識不足、守る意識の不足に大別された。これらの課題について、ワークショップ本大会では行動計画を策定した。

キーワード

アンケート、小笠原諸島、地域づくり、母島

1. はじめに

2021年に開催した「オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ」は、国際自然保護連合（IUCN）の野生生物保全計画専門家グループ（CPSG）が実践する絶滅危惧種の保全計画をつくるためのPHVAワークショッププロセスを採用した（Conservation Planning Specialist Group, 2021）。このプログラムは通常、関係者が一同に集まり、長時間にわたって、生物学的情報の共有、課題抽出、目標設定、行動計画策定という過程を進めていく。2008年1月に同手法によって実施された「アカガシラカラスバト保全計画づくり国際ワー

クシヨップ」は、3日間かけて行われた(アカガシラカラスバト PHVA 実行委員会、2009)。しかし、オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ実行委員会では、今ワークショップの参加を想定した、約100人に及ぶ関係者が、数日間連続して議論する時間を確保することは難しいと判断した。そこで、12月19日のワークショップ本大会では目標設定および行動計画策定のプロセスを行う事とし、それ以前のプロセスはワーキンググループ毎に事前に会合を持つなど工夫した。オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップは、生息域内保全、生息域外保全、共生社会ワーキンググループおよびその他の小ワーキンググループに分かれて保全計画づくりを行った。このうち、共生社会ワーキンググループは、オガサワラカワラヒワが餌場として季節利用する有人島母島において、オガサワラカワラヒワと共生する島づくりを議論のテーマとしている。共生社会ワーキンググループでは、生物学的情報の共有を講演会形式、課題抽出をアンケート方式で実施した。ここでは、ワークショップ本大会前に行った、共生社会ワーキンググループにおける課題抽出のプロセスおよび抽出された課題について取りまとめた。

2. 課題の抽出方法

2-1. 生物学的情報の共有

課題抽出に向けて、まずはオガサワラカワラヒワの基本情報および減少要因と考えられる脅威について、共生社会ワーキンググループ参加者と共有した。方法はオンライン形式の講演会とした。なお、この講演会はワークショップ参加者だけでなく、父島および母島在住者(Zoom形式)、島外在住者(YouTubeライブ)に向けて行った。講演会の詳細は以下のとおりである。

演題：「オガサワラカワラヒワ～日本で最も絶滅の危機にある固有の鳥」

演者：川口大朗(アイランズケア)、川上和人(森林総合研究所)、齋藤武馬(山階鳥類研究所)、南波興之(日本森林技術協会)

主催：オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ実行委員会/ボニン・インタープリター協会

協力：東京都公園協会

開催日：2020年11月13日(父島島民対象)、2020年11月20日(母島島民対象)

2-2. 他地域事例を学ぶ講演会の実施

共生社会ワーキンググループに参加する島民の多くは、これまで絶滅危惧種の保全に関わった経験を持たない。したがって、ワークショップ実行委員会では、オガサワラカワラヒワの絶滅回避において何が地域的課題なのか、また、日常生活の中でどのような貢献ができるのかについて、事前に参加者が考えるきっかけを作る必要があると考えた。そこで、先行事例として、沖縄で行われてきた絶滅危惧種ヤンバルクイナ *Hypotaenidia okinawae* の

保全活動を共有するオンライン講演会をワークショップ参加者向けに実施した。講演会後に、アンケート調査を実施した。講演会の詳細および公演後に実施したアンケートの設問を以下に示す。なお、アンケートの設問2に寄せられた意見は、本ワークショップ共生社会ワーキンググループの課題として利用した。

演題：「沖縄から学ぶ ヤンバルクイナ保全 現地の取り組み」

演者：長嶺 隆（どうぶつたちの病院沖縄）

主催：オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ実行委員会

開催日：2020年11月26日

講演会後に実施したアンケート

設問1：今日の長嶺先生の沖縄の保全の話聞いてどう思いましたか？

設問2：あなたはオガサワラカワラヒワの絶滅回避のために何が必要だと思いますか？

設問3：前回の「オガサワラカワラヒワ講演会」を聞いてみて、感想があればお書きください。

アンケート対象者：ワークショップ参加者のうち、母島・父島に在住する、島民、行政関係者、環境コンサルタント会社職員

アンケート受付期間：2020年11月26日～27日

2-3. 課題抽出アンケート

生物学的情報の共有、他地域事例の共有を経て、共生社会ワーキンググループの課題抽出を行った。方法はアンケート方式である。設問は下記のとおりである。当初、実行委員会はこの課題抽出アンケートのみを共生社会ワーキンググループの課題抽出プロセスとして計画した。しかし、ワークショップ参加者から、上述のヤンバルクイナ保全に関する講演会後に行ったアンケートにおいて、同様の設問（設問2）があった事から、二度手間ではないかという意見が複数寄せられた。この意見を受けて、実行委員会は計画を変更し、これら2つのアンケート結果を課題抽出のプロセスと位置づけて意見を集約した。

設問1：この鳥を守るために、あなたが考える島の課題をあげてください。

（回答例：ネコの捕獲が足りていない、次世代が育っていない、保護する機関が母島にない、認識が不十分、皆がオガサワラカワラヒワを知らないなど（過去のアンケートから抜粋）

設問2：自由記述欄（その他、ご意見、ご要望、感想などをお書きください）

アンケート対象者：ワークショップ参加者のうち、母島・父島に在住する、島民、行政関係者、環境コンサルタント会社職員

アンケート受付期間：2020年12月10日～15日

2-4. 課題の整理

実行委員会に寄せられた共生社会ワーキンググループの課題は、共生社会ワーキンググループにおいてファシリテーターおよび副ファシリテーターを務めた佐々木哲朗、宮城雅司、向 哲嗣、金子 隆の4名で整理し、大項目ごとにグルーピングした。このプロセスは本来ワークショップ参加者全員で行う事が理想的であり、ブレインストーミングの効果が得られると考えられる。しかし、今回のワークショップにおいては時間的成約から断念し、実行委員会が中心となり行った。また、グルーピングした課題の大項目は、2020年12月17日からワークショップ本大会の12月19日朝までに投票を行い、その時点での優先順位付けを行った。

3. 抽出された課題

3-1. 課題の整理

2回のアンケートによって寄せられた総回答数は83件(ヤンバルクイナ講演会後のアンケート回答数60件、課題抽出アンケート回答数23件)であった。寄せられた課題は多岐に渡ったが、重複を削除した上でグルーピングすると、①ネコ対策が不十分、②母島のネズミ対策が不十分、③母島の生息環境が不安定、④母島での調査研究が不足している、⑤保全する組織体制がない、⑥オガサワラカワラヒワについての知識が不足している、⑦守るという意識が不足している、の7項目に大別された(表1)。

3-2. 課題の大項目の優先順位付け

ワークショップ本大会開催前において、共生社会ワーキンググループ参加者対象に行った優先課題の投票では、「保全する組織体制がない(30票)」が最も得票数が高く、以下「母島でのネズミ対策が不十分(29票)」、「ネコ対策が不十分(17票)」、「オガサワラカワラヒワについての知識が不足している(17票)」、「守るという意識が不足している(17票)」、「母島の生息環境が不安定(餌場水場など)(10票)」が続いた(図1)。ワークショップ本大会では、共生社会ワーキンググループは共生社会H(Habitat=生息環境の略称)と共生社会S(System=組織・体制の略称、Social=社会的の略称)の2つのサブワーキンググループに別れて議論した。そして、共生社会Hは「ネズミ対策」「ネコ対策」「餌場水場管理」について議論し、共生社会Sは「組織体制」「知識不足」「守る意識不足」について議論した。

表 1. 共生社会ワーキンググループにおいて抽出された課題

Table 1. Issues identified by the symbiotic society working group

<p>課題 1. ネコ対策が不十分</p> <ul style="list-style-type: none">・ノネコ対策の予算不足・母島にネコ待ち（捕獲ネコの一時飼養施設）がない。・オガサワラカワラヒワの保全も視野に入れたネコ対策が不十分。・母島のノネコの捕獲がスムーズに実施できていない（搬送、受け入れの問題で停止する可能性がある）。・母島のネズミ&ネコセットでの捕獲が徹底されていない。 <p>課題 2. 母島のネズミ対策が不十分</p> <ul style="list-style-type: none">・クマネズミ対策がなされていない。・農家とのコミュニケーションが足りていない。・農地のネズミ対策が不足している。・有人島でのネズミ対策が不十分。・母島のクマネズミ対策が不十分。・ネズミの専門家が不足している。 <p>課題 3. 母島の生息環境が不安定</p> <ul style="list-style-type: none">・ソルゴー栽培が減った。・母島の公有地が保全目線で活かされていない。・母島島内に安全な餌場、水場がない。・餌場のメンテナンスが必要。・安全な自然保護区がない。 <p>課題 4. 母島での調査研究が不足している。</p> <ul style="list-style-type: none">・個体数減少の原因がはっきりしていない。・母島の調査・モニタリングが不十分。・生態研究が不十分。・重要な餌が特定されていない。・農薬等、薬剤の影響が分かっていない。・感染症の影響が分かっていない。
--

表 1. 続き

Table 1. Continued

課題5. 保全する組織体制がない。

(体制)

- ・できることがあるのにすぐに実行できていない。
- ・保全行動が遅い。
- ・母島に環境課がない。
- ・母島の環境省の職員が足りない。
- ・実現可能な対策が考えられていない。
- ・継続的な保全策が不十分。
- ・保全計画がない。
- ・保護増殖計画が策定されていない。
- ・複数の対策が同時に実行できていない。
- ・一致団結ができていない。
- ・行政がオガサワラカワラヒワを守る明確な方針を持っていない。
- ・保全に関わるボランティア活動がない。
- ・地域住民から始まる保全活動が行われていない。
- ・村内の体制がオガサワラカワラヒワ保全のために整っていない。
- ・島民がこの対策に協働できる活動がない。
- ・保全を進められるリーダーシップがない。

(人員)

- ・コアになって活動し続けられる人、団体がいない。
- ・研究者が足りていない。
- ・他の絶滅危惧種が多く、手が回っていない。
- ・行政の人員体制が不足している。
- ・母島支所に環境課の職員がいない。
- ・保全に係る人出が不足している。
- ・保全に関わっている人が一定の人たちに偏っている。そのメンバーで何もかも廻している。
- ・オガサワラカワラヒワの研究者と調査チームが不足している。

(拠点)

- ・繁殖地（向島）に拠点（宿泊等）がない。

表 1. 続き

Table 1. Continued

(資金)

- ・資金不足
- ・行政の資金不足
- ・行政の予算に頼っている。
- ・クラウドファンディング等によった行政によらない自由度の高い予算の確保ができていない。
- ・予算不足に対して、獲得可能な助成金やクラウドファンディングなどに申請ができていない。
- ・入島税などの安定資金がない。
- ・保全の予算が不足している。

(その他)

- ・繁殖地が無人島の為、島民が関わりにくい。
- ・島民が属島の対策に関わるには安全上難しい。

課題 6. オガサワラカワラヒワについての知識が不足している。

- ・住民への周知が足りない。
- ・オガサワラカワラヒワ自体が知られていない。
- ・オガサワラカワラヒワを見たことがない。
- ・オガサワラカワラヒワを直接見られる場所がない。
- ・村のケーブルテレビが活用されていない。
- ・日本全国にオガサワラカワラヒワの現状が知られていない。
- ・母島本島におけるオガサワラカワラヒワの生態が分かっていない。
- ・海外を視野に入れた情報発信ができていない。
- ・島民のオガサワラカワラヒワの認知度が低い。
- ・オガサワラカワラヒワの現状や過去についてあまり知らされていない。
- ・島民の認識不足
- ・オガサワラカワラヒワの現状をタイムリーに伝えられていない。
- ・オガサワラカワラヒワの情報が少なすぎる。
- ・母島にビジターセンターがない。
- ・情報発信ができていない。
- ・母島に自然環境系の中心センター（ビジターセンターなど）がない。
- ・オガサワラシジミなどの絶滅の教訓が検証されていない。
- ・世界自然遺産科学委員会などがどこに有効に働いているのかが見える化できていない。

表 1. 続き

Table 1. Continued

課題 7. 守るという意識が不足している。

- ・住民の認識が不足している。
- ・住民の協力が不足している。
- ・地域に対する郷土愛が足りない。
- ・住民の危機感がない。
- ・オガサワラシジミに比べて危機が知られていない。
- ・好きになったり、愛でたりする関係性がない。
- ・主体性がない。
- ・子どもに伝えられていない。
- ・自分にできることを実行できていない。
- ・オガサワラカワラヒワの過去と人とのつながりが解っていない。
- ・ご当地ゆるキャラがない。
- ・愛称がない。
- ・一人一人が考え実行できていない。
- ・パッション 愛 そして行動が不十分。
- ・一般島民が参加できる調査がない。
- ・外来種対策の島民の意識が低い。
- ・オガサワラカワラヒワが絶滅すると困ると意識化できていない。
- ・学校教育に取り入れられていない。
- ・「一人ひとりができること」の具体的な提示がされていない。
- ・みんなが他人事であること。
- ・次世代不足
- ・関心が低い。
- ・住民の意識不足
- ・オガサワラカワラヒワを守る世論ができていない。
- ・島民に生々しく必死に語りかけていない。
- ・この問題が島民全体の課題となっていない。
- ・資金が無くても守るという気合いが足りない。
- ・保全活動がポジティブシンキングになれていない。
- ・保全のための民間&地域の理解と協力が不足している。
- ・危機感が一部の人たちだけで動いている。

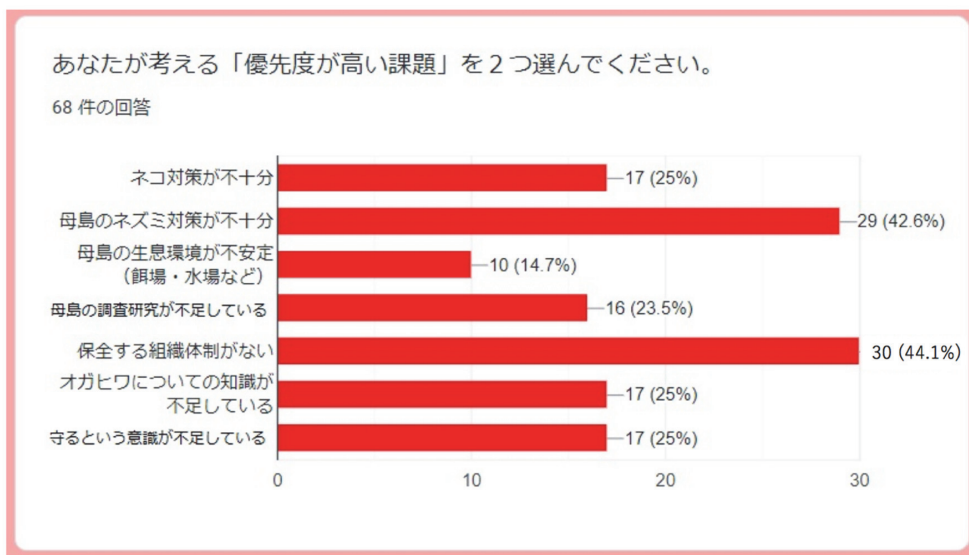


図1. 課題の大項目の優先順位投票結果

Figure 1. Voting results for main issue priorities

4. 謝辞

共生社会ワーキンググループの課題抽出にあたり、ご協力頂いたワークショップ参加者、課題の整理に協力頂いた宮城雅司、金子 隆の両氏に感謝します。

5. 引用文献

アカガシラカラスバト PHVA 実行委員会 (2009) アカガシラカラスバト保全計画づくり国際ワークショップ最終報告書. アカガシラカラスバト PHVA 実行委員会, 130p.

Conservation Planning Specialist Group (2021) The PHVA Workshop Process. <https://www.cpsg.org/our-approach/workshop-processes/phva-workshop-process>, Accessed 27 September 2021.

SUMMARY

Identification of issues for the symbiotic society working group at the Ogasawara
Greenfinch Population and Habitat Viability Assessment workshop

Tetsuro SASAKI^{1*} & Akitsugu MUKAI²

1. Institute of Boninology, Nishimachi, Chichijima, Ogasawara, Tokyo 100-2101, Japan.
 2. Islands Care, Shizukazawa, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
- * t-sasaki@ogasawara.or.jp (author for correspondence)

In December 2020, at Ogasawara Greenfinch Population and Habitat Viability Assessment workshop, we adopted the PHVA workshop process proposed by the IUCN to develop a conservation plan. Before the workshop, the working group on symbiotic society conducted a questionnaire survey to identify issues that needed to be addressed by the participants. The issues we identified were roughly divided into the following categories: inadequate measures against cats, inadequate measures against exotic rodents, unstable feeding and water environments, lack of research and study, lack of an organizational structure for conservation, lack of knowledge about the Ogasawara Greenfinch, and lack of awareness of its protection. We compiled an action plan to address these issues in this workshop.

Key words

Community development, Hahajima Island, Ogasawara Islands, Questionnaire survey